



ギリシャ哲学者 エンペドクレス、儒学者 佐藤一斎との出会い

(一財) 先端建設技術センター 理事長 佐藤直良

1. はじめに

先ず、顧問を仰せつかっている日本機械土工協会の機関誌に原稿執筆の機会を与えて頂き、感謝申し上げますと共に、協会加盟各社及び事務局の日頃のご活動に敬意を表させていただきます。

ここ最近のコロナ禍でそれまでの生活が一変し、人とお会いする機会が激減し、今まで培ってきた価値観が揺るぎかねない状況にまで追いやられた感が強くなります。一方、静かに一人で考える時間が増え今までの人生を深く見つめ直す時間も与えられたとも思っています。この際、特にかつて難局にあたり行く道を示し、さらにその後の人生の生き様を変えて頂いた方、あるいは書物から与えられた先人の金言等々が鮮明によみがえってきます。

今回 4 回シリーズで「邂逅（かいこう）」と題し、それらを紹介させていただきます。初回は我が人生の価値観を一変させた、ギリシャ哲学者エンペドクレスとの出会いと江戸時代の儒学者佐藤一斎の言葉です。（なお後者との出会いは別の機会に詳しく述べたいと思います。）

2. 自己紹介

筆者は、大学院卒業後建設省に入省し、最後は国土交通事務次官まで 36 年の長きに亘り役人生活を務めてまいりました。就職したときには、よもやこれだけの期間勤務するとは、ましてや自分が就職した役所がなくなり、省庁再編で国土交通省になるとは思いもよりませんでした。

役人生活を思い返すと、数多くの失敗と禍根が思い浮かびますが、給料を頂きながら世の為、人の為に働いた事は感謝以外の何物でもありません。一番記憶に残っているのは何と言っても東日本大震災です。発災時の揺れの恐怖感はもとより、大津波が襲来し多くの人々の命と生活が無残にも失われていく様子を目の当たりにしたときの自然の脅威に対する無力感、虚脱感、さらに福島原発の爆発、その後の放射能汚染とそれまでの人生では遭遇したことがない経験でした。近代社会が築き上げてきた価値観が自然の営みから否定されたと言っても過言ではありません。2年前に福

島の帰還困難区域を訪れる機会がありました。衝撃的な現地の姿でした。まさにあの時以来時間が止まっているかの状態でした。震災からの復興が緒にもついていない地域を前に、自らの反省を含め多くの事を考えさせられました。

3. 万物の根源エンペドクレスの考えとの出会い

平成 4 年、九州の佐賀市の助役へ転任を命ぜられました。39 歳の時でした。当時佐賀県内市町村で初の中央省庁からの助役招請での就任と言うことで、地元新聞、放送局で大々的に報道されていました。丁度息子が中学入学時にあたり、初めての単身赴任生活が始まりました。佐賀という地名はそれまでも知っていましたが、地図上の正確な位置も知らず、ましてや歴史、風土等に関しての予備知識も全くと言ってよいほどありませんでした。

我々役人の世界では、地方に赴任した時には先ず地元の歴史を勉強する事が大事だ、という先輩から伝わる教えがありました。4 月に就任して以来、あいさつ回り、行事参加の合間に真っ先に手を付けたのは、佐賀市史を手始めに、佐賀の歴史の勉強でした。余談ですが、『佐賀市 saga-city（意味は「聡明」）は英和辞典に載っている唯一の日本の都市である』と地元の方々に紹介したところ、知っている人は誰もおらず、この話題は大うけでした。

初夏に入るとき、休日は自転車を駆使して市内の名所旧跡を訪ねる機会を多く持ちました。仕事で知り合った当時の佐賀県の土木部長とも一緒にさせて頂き、良い汗をかいたのが昨日のように思い返されます。

ひと通り主要施設を回った後は、県立図書館をよく利用しました。午前中から本を読み、昼食（それまで味わったことのなかった、とんこつラーメンがお気に入りでした。）を外でとり、また午後は、時には厚い本を枕がわりに昼寝と、まさに至福の時を過ごしました。

とある日、一冊の本が目にとまりました。確か「ギリシャ哲学者列伝」？と言ったタイトルだっ



たと思います。昼寝の枕代わりには適当な厚さというだけで、思わず手に取っただけでした。万物の根源等について、古代の偉人と言われる先人達の思索が記された書物でした。(高校時代に習った記憶では、万物の根源は、タレスは「水」、ピタゴラスは「数」位の知識がありました。) ページを次々にめくり流し読みをしていくと、ぱっと視界が開けるかのような錯覚に陥りました。これが、今までになく胸が高なった人物エンペドクレスとの出会いでした。後の西洋キリスト教文明に大きな影響を与えたと言われている哲学者です。彼は、万物の根源(アルケー)は水、土、空気、火の4つであり、その調和を保つのが人間の「愛」、乱すものが「憎」と説いています。この論を基に小生なりに万物の根源に思いをはせました。エンペドクレスの「火」に替え「太陽」を置くと、人間を含めた生物の生息・生育環境の基本要素となります。即ち「水、土、空気、太陽」の4つです。この自然の根源と愛に満ち溢れた人間活動が相まってこの世界が形成、維持されていくものである、との論に至り、その後の役人生活のベースの考えとなりました。

水質、大気、土壤汚染等のいわゆる公害問題はもとより地球温暖化に至るまで人類がこれまで大きな犠牲を払って経験した貴重な教訓からも、如何なる人間活動もこれら4つの根源(アルケー)を極力汚すあるいは損なう事無く、次世代に良好な状態で引き継ぐことが、今生きる我々の使命であり、仮にやむを得ない場合は、代替処置を講じることが必須だと強く心に刻み、今でもこの考えを根本においています。

4. 過去・現在・未来 佐藤一斎の言葉

地域の今ある姿は、それまでの地域の歩みの集大成とも言われています。自然条件と人々の生活との相互関係から、独自の住まい形式、生活様式のみならず、言い伝え、地名等々、連綿と現在まで伝わっているものが多々あります。これらを顧みず、時々流行のみを頼りに即物的あるいは観念的な観点のみで構成された施策は、歴史の時間軸で不連続点となりがちで安定性、継続性の観点から心もとないものと言わざるを得ません。企業活動でも同様だと思われま

江戸時代の儒学者 佐藤一斎の言葉

「古住の歴史は、これ現世界にして、今来の世界はこれ活歴史なり」

人間は常に様々な不平不満を言いがちです。また地域経営、会社経営においても課題を挙げてそ

の解決を目指す、という姿勢になりがちです。その姿勢は否定されるものではありませんが、同時に良い点を理解するのが肝要です。

子供の教育と同じです。短所の改善を迫るより、先ずその子の持っている良い点・長所を伸ばすことが大事だと言われています。

当時佐賀市では春秋2回市民総出で「水対策市民会議」が核となり、自治会をベースに企業等も加わり、市内に網の目状に存在するクリークの一斉清掃が恒例行事として行われていました。また、道路歩道の「花いっぱい運動」も行われていました。福祉施設の子供達に花の苗づくりを行ってもらい、それを市が買い取り、沿道の住民が主になり歩道に植えて頂く運動です。これらの活動は昔から伝わる「普請」そのものと言えます。また前記4つの根源(地域資源)を良好な姿で次世代に引き継ぐ活動とも言えます。ここに哲学者エンペドクレスと儒学者佐藤一斎の考えが融合した姿を見た思いでした。

幕末の鍋島藩では、藩校弘道館を開き、新しい時代を切り開く人材の育成に力を入れていました。この様な歴史的営みが直近の明治維新に貢献したのみならず、培われた地域社会の濃密な人間関係とも相まって、100年後の佐賀の人々の生活にもつながっていると今も確信しています。

現在世界的に「民主主義」「資本主義」の危機が叫ばれており、「人間的資本主義」等新しい考え方も提示されています。またSDGsでは「持続可能な開発目標」が大きなテーマとなっています。これからの未来を描くには、過去から現在に至るまでの営みに貴重な教えがあるはず

=====プロフィール=====

佐藤 直良(さとう・なおよし)

平成4年4月佐賀市助役、平成6年4月建設省河川局治水課河川室建設専門官、平成7年4月同河川環境課都市河川室建設専門官、平成9年4月同河川計画課河川計画調整官、平成11年4月建設省四国地方建設局河川部部長、平成13年1月国土交通省四国地方整備局河川部部長、平成14年7月水資源開発公団企画部部長、平成15年10月独立行政法人水資源機構経営企画部部長、平成17年10月国土交通省大臣官房技術調査課課長、平成18年同技術審議官、平成20年同中部地方整備局局長、平成21年7月同河川局長、平成23年1月国土交通省技監、平成24年9月同事務次官、平成29年6月一班社団法人先端建設技術センター理事長